

発行：株式会社リンク・インタラック
 担当：事業統括部 商品開発ユニット
 住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
 TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：marketing@interac.co.jp



高校生の英語運用能力を伸ばす スピーキングテストの開発

高校では今年度から、新学習指導要領が年次進行で始まりました。今回の改訂では、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱からなる資質・能力をバランスよく育むことにより、次世代育成につなげます。外国語教育においてその成否のカギを握るのが、コミュニケーション能力を測るパフォーマンス型のテストの導入です。このほど、リンク・インタラックでは観点別学習状況の評価が可能な「英語スピーキングテスト事例集」を弊社のクラウドサービス「Teachers Cloud」上で公開しました。小学校の外国語活動、教科「外国語」から連なる英語学習の総仕上げとして、高校での授業指導・学習評価の改善に役立てていただこうというものです。本事例集の作成者である敬愛大学の向後秀明教授に、テストの意義や特徴、使い方についてうかがいました。

観点別学習状況の評価がいよいよ高校で始まる

——平成30年告示の高校学習指導要領が今年度から実施となりました。まず、現在の高校での外国語教育における課題にはどのようなものがありますか？

高校生が将来、英語とどう向き合っていくことが求められるのか、時代の変化を押さえたうえで英語教育の原点に立ち返ることが求められています。大学入学共通テストからスピーキングテストがなくなったからといって、スピーキングが不要になったわけではありません。大学入試という直近のゴールと、この先、生徒が社会でどう生きていくかという広い視野からのゴールの両方を見据え、4技能5領域を総合的に学習することが重要です。そして、そのことが生徒の将来の可能性の拡大につながることを教員が認識する必要があります。

こうした前提に立つとき、高校では新学習指導要領の実施に伴う「観点別学習状況の評価」（以降、観点別評価）の実践が目下の課題となるでしょう。小学校、中学校では1つ前の学習指導要領のときに観点別評価の実践経験があります。本来、高校でも実践することになっていましたが、指導要録への記載が求められなかったこともあって進まなかった実態がありました。高校の先生方の多くは、観点別に分析的評価をし、総括して評定に結び付けることに慣れていないのが実情です。

見方を変えると、観点別評価は目標に準拠した評価です。目標を作成し、生徒がどこまで達成すればよいかを示す評価規準を作り、それらに基づいて指導と評価の計画を作って授業を行います。このプロセスを通して、「指導と評価の一体化」を目指さなくてはなりません。「英語を用いて何ができるようになるか」をCAN-DOリスト形式の学習到達目標として明確に設定し、それに基づいた単元レベルでの指導と評価の計画を作成することが求められます。

“定期考査が何割で、平常点が何割”といった考え方からい



敬愛大学 英語教育開発センター長 国際学部 向後 秀明 教授

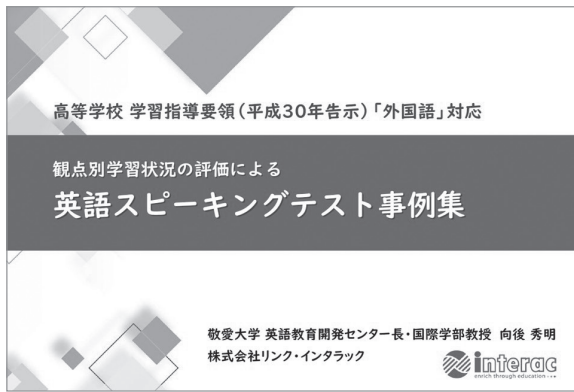
ち早く脱し、ぜひ、新しい指導と学習評価の世界に入り込んでほしいと思います。

英語のスピーキングテストがなぜ必要なのか

——新学習指導要領で目指す教育を行うためには、新たな指導と学習評価は不可欠ということですね。改めて、そもそもスピーキングテストを行う意義を教えてください。

スピーキング能力の評価は、実際にスピーキングが行われている場面でのみ評価が可能です。言い換えれば、スピーキング能力を筆記テストで測定することは不可能だということです。

5つの領域のうち2つ、「話すこと[やり取り]」と「話すこと[発表]」の評価を行うためには、スピーキングテストの実施が不可欠になります。また、「話すこと」を1回のみでのスピーキングテストで評価するのは困難なので、学期ごとに複数回のテストを行うことが必要です。



高等学校 英語スピーキングテスト事例集

—スピーキングテストを行うにあたり、気を付けることは何でしょうか。

1つ目は、スピーキングテストの設計です。具体的には、(1)「話すこと」に係る学習到達目標 (2) 目標を達成したかどうかを測るスピーキングテスト (3) スピーキングテストの採点基準、これらの検討・設定が最初の関門となります。

2つ目は、スピーキングテストの運営や採点の方法です。先生方が教室で実施できるものかどうか、評価者は日本人教師1人なのか、ALTなどと2名体制でできるのか、ICTを活用する場合はその環境がどうかなども検討します。

全学年で使える30テスト、
教師用マニュアル・採点基準も完備

—「英語スピーキングテスト事例集」の特徴を教えてください。

7点あります。1点目は、評価する先生方の人数やICT活用、テスト時間の設計等において、実行可能性を考慮したスピーキングテストにしていることです。2点目は、生徒が興味・関心を持って取り組むことができる話題を扱っていること。

3点目は、テストに至るまでの活動を併せて示していることです。スピーキングテストだけを提案するのではなく、テストの前にもどのような活動が必要になるかを明記しました。4点目は、1つずつのテストに、教師用指導書(ティーチャーズ・マニュアル)を添付したことです。マニュアルには教師の指示や発話例、スピーキングテストの流れまでを盛り込みました。

5点目は、国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』(令和3年8月)にできるだけ沿う形で採点基準を設定したことです。6点目は、1学年から3学年までをカバーしている点です。1学期と2学期は4つずつ、3学期は2つで、各学年計10のテストを用意しました。3学年で合計30のスピーキングテストを準備しましたので、高校全体をカバーできるでしょう。

7点目は、「やり取り」と「発表」の両方を含めるとともに、「日常的な話題」と「社会的な話題」のバランスに配慮している点です。

実際に見ていただくとわかりやすいと思います。「TEST 08 第1学年2学期 話すこと [やり取り] (社会的な話題)」のテスト例を見てみましょう。

各テストは、「インストラクション」「ティーチャーズ・マニュアル」「採点基準」の3つのパートからなります。

例えば、TEST 08では、コンビニエンスストアの24時間営業の是非という、社会的な話題でも生徒に身近な話題を設定しました。まず、教師がその是非のどちらかの意見を言い、それに対して生徒が反論するディベート形式のテストです。

テストの実施方法や留意点は、ティーチャーズ・マニュアル

に明記しました。教師が賛成の立場から話す場合の発話例と、反対の立場から話す場合の発話例の両方を掲載しています。採点基準は、国が示した「評価の観点ごとの採点基準」の形に添って示しています。

スピーキングテストが初めてで、どうすればよいか戸惑っている先生も少なくないでしょう。この事例集は、そのような先生方にとっても即戦力になると考えています。高校の新学習指導要領の外国語は、「英語コミュニケーション」と「論理・表現」の2つの科目群に分かれていますが、どちらでも利用できます。特定の教科書や参考書に準拠したものではなく、完全オリジナルの事例集となります。

学校や生徒の状況に合わせた柔軟な活用を

—スピーキングテスト事例集は、生徒の状況に関わらず、このまま使用した方がいいのでしょうか？

いいえ、必ずしもそうではありません。あくまで変更可能な「事例集」として、各学校においてスピーキングテストの材料にしていただければと思います。学校や生徒の状況に応じて適宜変更して活用することが大事です。ティーチャーズ・マニュアルの発話例をそのまま読み上げるのではなく、生徒をよく観察し、指示の内容やテスト時間、準備型にするか即興型にするか、さらには採点基準そのものも変更可能なものと考えてください。

テストは基本的に番号順に難度を上げていますが、順番を変えて実施することもできます。問題を見ていただき、「うちの学校ではもう少しハードルを上げよう」と変更するのも可能です。そのためには、冒頭に掲載した「スピーキングテストの評価(採点)イメージ」を読み、スピーキングテストについて先生方が共通のイメージを持つようにしてください。

—スピーキング以外のテストにも応用できますか？

はい。「話す」を「書く」に置き換えれば、ほぼすべてライティングテストとしても活用できます。テスト前の生徒と先生のやり取りや活動は、事例集通りに行います。その後、「この話題について“書いて”みよう」と変更するだけでいいのです。さらに、採点基準の「話す」を「書く」に置き換えることで、評価もほぼ同じようにできます。

英語科でのサンプル採点がおすすめ

—この事例集に基づいたスピーキングテストを導入する際、英語科でどのように取り入れていくとよいのでしょうか。

実際にテストを実施する前に、英語科の中で「模擬スピーキングテスト」を試せたら理想的です。もし先生方が集まって模擬テストをする時間がない場合は、生徒を数名抽出して試しに受けてもらう「サンプルスピーキングテスト」をお勧めします。サンプル採点・評価をして、英語科の会議で本格導入に向けた課題や見通しを検討してください。録画したサンプルテストの生徒の発話を全員で見て、「この評価はA? B?」と目線合わせ、すり合わせをしておいてからスタートしましょう。

スピーキングテストに挑戦してみたい、と考える意欲ある先生には、ぜひ、本事例集を用いたサンプルテストの模様を録画して、会議で他の英語科の先生方に見せてください。ここでちょっとしたコツがあります。サンプルテストは成功事例ではなく、「失敗例」を出しましょう。「やってみただけ、ここで指示の出し方を失敗しちゃいました」などと推進役の先生が、敢えてうまくいかなかった点を示すことで、他の先生方のスピーキングテストに対する心理的なハードルがぐっと下がります。達人の成功例ではなく、試行段階で浮かび上がった課題を共有する方が学ぶことは多いはず。また、当然のこ

とですが、サンプルテストに協力してくれる生徒には録画の目的を事前に説明し、撮影許可を取っておきましょう。

録画したサンプルテストの様子を他の先生に見せて、「自分はこんな評価になったのだけれど、先生にも採点してもらっていいですか?」と持ちかけるのもよいでしょう。英語科全体が「みんなで採点してみよう、どのぐらいブレがあるかをみよう」という雰囲気になれば最高です。生徒の実態に応じて、テスト内容や採点基準をアレンジする必要性があれば、そこから議論が広がっていくはず。1つのスピーキングテストがすべての高校において万能になることはありません。ぜひ先生方には柔軟性を発揮していただき、自校にあったスピーキングテストを目指していただきたいと思います。

授業と評価の両面でALTの活用を

—ALTはスピーキングテストにどのように関わることができますか?

そもそも高等学校におけるALTの活用割合が、小・中学校に比べて極端に低いことは、国も指摘しているところです。もっと授業と評価の両面でALTにサポートしてもらうという視点で活用すべきです。

評価を例に考えてみましょう。一つは、生徒がスピーキングテストのやり方を理解するのをサポートしてもらうことです。スピーキングテストで扱う話題の導入として、JTEとALTがやり取りをする、スピーキングテストで求められることをALTがサンプル提示する、といった方法があります。ALTの授業スケジュールでサンプルを生で見せられない場合は、事前に録画をしておき、「今回のテストはこんな感じ!」と各クラスで生徒に見せることもできます。

もう一つは、評価そのものに参画してもらうことです。評価者の一人としてサポートしてもらうのです。40人のクラスだと1人1分しかできないスピーキングテストを、JTEとALTで20人ずつに分ければ1人2分できる、という発想です。ただし、採点をALTにすべて任せてしまうのは避けるべきです。日本人がスピーキングテストの評価に関わらないことは、あってはなりません。説明責任も含めて日本人が評価の計画・実行を担い、そこにALTのサポートが入る構図は維持しましょう。指導者・評価者が1人増えればよりよい授業指導やテストが実施できると考えて、ALTをより積極的に活用していくべきです。

アジアで最も話されている英語、
その力を高めるために

—スピーキングテストの必要性やメリットを、生徒にどのように伝えていくとよいでしょうか。大学入学共通テストで問われないから「必要ない」と思う生徒もいるのではないのでしょうか。

4技能5領域を総合的に評価することは、世界の英語教育では当然のこととして捉えられています。少なくともその点で日本が今まで遅れていたことを、教師はしっかりと認識する必要があります。そして、英語の評価は筆記テストだけではないこと、外部資格・検定試験ではスピーキングが評価されるのに、学校のテストにスピーキングがないというのは不自然なことだと、教師も生徒も理解すべきでしょう。

スピーキングによるアウトプットの指導を展開していけば、ライティング力の向上にもつながります。与えられた課題について考え、意見を述べようと思えることは、ライティングにも大きなメリットがあるのです。よく「ライティングで何を書いているかアイデアが浮かばない」「浮かんだアイデアが難しくすぎて英語にならない」と、手が止まってしまう生徒がいます。スピーキングの学習は、言いたいことがあるけれど、それに該当する英語を直接的に使えない場合、自分が持っている知識や技能を総動員して言い換えて表現する訓練になります。それを積み重ねていけば、ライティングにも大きなプラス効果があるのです。大学入試について、国は4技能を総合的に評価することの趣旨を変えていません。そのため、入試で資格・検定試験を活用する大学はますます増えていくでしょう。その意味でも、スピーキングテストを高校で日常的に行うことは重要だと考えられるのです。

今や世界の英語ユーザーはアジアが最も多いのです。つまり、アジアの人たちとやり取りする主要言語は英語だという事実があります。また、日本国内で就職する際も、英語から全く切り離された世界は次第になくなりつつあります。そうした状況を見据えると、スピーキングテストを通してスピーキング力を伸ばしていくことの必要性は明白です。これからはスピーキングテストで「点数が付く」という発想ではなく、スピーキングテストを受けることで自分の強みと弱みを知り、スピーキング力を「上げていく」という発想をすることが求められているのです。

創業50周年記念イベント

子どもたちの ドリームサポートプロジェクト

小学生対象のオンライン形式

英語スピーチコンテスト

5/2~ 応募受付

このQRコードからお申し込み下さい

テーマ「私の夢」

対象 全国の小学校4年生~6年生

申込期間 2022年5月2日 ~ 2022年6月30日

コース ・一般部門 ・帰国子女部門

開催期間 第1次選考: 9月~ 結果発表:10月 3日(月)
第2次選考: 10月~ 結果発表:10月28日(金)
最終選考: 11月20日(日)

英語スピーチコンテストに
ふるってご応募ください!

※募集要項については弊社のホームページからご確認ください。 <https://www.interac.co.jp/>